

そのままのあなたで

藤岡市立西中学校

二年 高橋 心桜

「はあ：・なんでできないの？」

球技大会本番でそのひと言を言われたとき、私は何も言い返すことができなかった。たったひと言なのにどうしてこんなにも心に残るのだろうと、今でも考えることがある。

球技があまり得意ではない私は、自分なりに練習を重ねてきた。少しでも迷惑をかけたくない、そう思っ
て挑んだ球技大会だった。それなのに、その一言で、これまでの努力が一瞬で消えてしまったように感じた。コートに立っていることがとても怖くなった。周りの声やボールの音が、急に遠くに聞こえた気がした。

もともと私は、学校に行くことが好きな方だった。友達と話したり、授業を受けたりする何気ない毎日が、当たり前で楽しかった。けれどあの出来事があった日以降、学校が怖くなった。友達の笑い声さえ、自分のことを言われているように感じてしまった。

朝になると「今日は教室に行こう」と思う。それなの

に体がだるく、思うように動けなかった。

「学校に行かないでこの先どうするの。」

母の言葉が正しいことも分かっていた。それでも私は、先の不安より、毎朝教室のドアを開ける怖さの方が耐えられなかった。

別室登校が続く日々。先生は「無理しなくていいよ」といつも優しく声をかけてくれた。

その言葉に安心する一方で、教室からどんどん離れていってしまうような不安もあった。みんなが当たり前のように過ごしている教室が、少しずつ遠い場所になっていく気がした。

「このままでいいのかな。」

そう思いながら、自分と向き合う毎日が続いた。

クラス替えて、新しい環境になったとき、もう一度教室に入ってみようと思った。不安は消えていなかった。それでも前に進みたいと思った。

家族はもちろん、別室登校になつてからも変わらず、接してくれた友達がいいた。何気ない話をきちんと聞いてくれる先生もいた。

その人たちと関わるうちに、「そのままのあなたでいいよ」と言われているような気がして、少しずつ安心できるようになった。だから私は、もう一度教室に入ることができた。

あの日の記憶は今でも消えていない。けれど、自分と向き合ってきたからこそ、一步を踏み出すことができたのだと思う。

別室で過ごすうちに、私は少しずつ、「私は私のままでいい。誰かと比べなくてもいい」と思えるようになっていった。

悩んでいる私、笑顔の私、怒っている私、ふざけている私。いろんな私を認めてくれる人たちがいて、「私らしさ」が少しずつはつきりしてきた気がする。

そして相手の気持ちも、少しずつ受け止められるようになってきた。それも「あなたらしさ」なのだと思う。相手にも、何か辛いことや苦しいことがあったのかもしれない。そう考えると、相手を少し冷静に見られるようになった。

学校にいけなくなると、「普通」にできない自分を責めてしまう人もいると思う。私自身、何度も苦しんだ。けれど、今は無理をして周りに合わせることでだけが正しいわけではないと思っている。教室に入れる日もあれば入れない日もある。前に進める日もあれば、立ち止まる日もある。それでも、その人なりに毎日を頑張っていることに変わりはない。大切なのは、「みんなと同じ」でいることではなく、自分自身を否定しすぎないことなのだと思う。

そして「どうしてできないの？」ではなく、「何が辛いのだろう」と相手の気持ちを想像できる学校や社会になってほしい。

「無理しなくていいよ」「そのままのあなたでいいよ」そんな言葉があったからこそ、私はもう一度前を向くことができたのだと思う。

社会の中で、お互いの考え方がぶつかり合うことはある。それでも、お互いの違いを否定するのではなく、「なぜそう感じるのだろう」と相手を知ろうとすることが大切なのではないかと思う。

私は相手のことをよく知り、相手の気持ちを想像し、安心できる言葉をかけられる人になりたい。そう、今世の中に必要なのは相手のことを考える「想像力」だと思う。

誰かを無理に変えようとするのではなく、「想像力」を働かせ、相手の立場を考え、よく話し合いそれぞれの違いや悩みを認め合う、それが自分らしく生きられる社会、互いを尊重できる社会なんだろうと思う。

あなたは自分らしく生きていますか。それぞれの「らしさ」が輝く社会とともに創りましょう。